

元禄の大坂俳人長井伴自覚書

竹 下 義 人

元禄から正徳にかけての大坂俳壇は、来山・才麿とその両者の

門人たちの活躍によって支えられ、展開していた。そして、こ
で言う門人たちとは、ほとんどが元禄に入ってから本格的な俳諧
活動を開始する新進であった。とくに、来山門ではこうした新進
の活躍が目覚しく、文十・椿子・季範・李天・東行・大立・何中
らの活動には等閑視できないものがあつた。本稿でとりあげる長
井伴自も、活躍期からすれば、文十と並ぶ力量をもった新進の一
人で、来山門を代表する典型的な元禄俳人であつた。だが、当時
の伴自は、雑俳点業に非常に熱心であつたために、従来の研究史
上でも雑俳史の中でのみ扱われることが多く、俳歴などは不明の
ままにされていた。そこで本稿は、伴自がどのような俳諧活動を行
なっていたのか、俳人間の交流を中心に、その一端を明らかに
するものである。

一

『誹家大系図』によると、伴自は来山門家久としてつぎのよう

に記されている。

長井氏。通称詳ならず。蚊市と号す。又伴自軒と称す。後伴
自を以て号とす。家書ひばり笛あり。

まず右の記述を確認することから始めたい。

入門時期は定かではないが、来山門であることは、来山百ヶ日
追善集『木葉古満』（享保二年）に序文並びに追悼句を寄せてい
ることや、来山系俳書への入集状況から推して誤りはなからう。
では、来山と伴自とは具体的にどのような形で結ばれていたのだ
らうか。まず、年齢的にはほぼ同世代であつたとみていいだろ
う。伴自は、来山が十九歳の時、つまり寛文十二年、この年刊行
された『大海集』に家久として初出する。この頃を伴自の俳人と
しての出発時期とすれば、来山との間にさしたる年齢差があつた
とは考えられないであらう。そこで、伴自・来山の同座した連句
を挙げてみると、『みとせ草』（元禄十年）、『こころ葉』（宝永四
年）、『海陸前集』（宝永四年）、『花橋』（正徳三年）、『土の餅』（享
保四年。来山・伴自没後刊行）等があつて、二人の親密度はそれ

なりに計れるのであるが、貞享五年・元禄五年の来山の両歳且集には、文十・椿子・季範らの名はあっても伴自の名は見えず、元禄初年頃には、伴自が来山の勢力圏に属していなかったことがわかる。あえて来山に親炙した時期を限定するならば、元禄中期頃と考えられようか。いずれにせよ、今は、伴自が来山門であったと認められても、二人が確たる師弟関係で結ばれていたとは考えにくい。さらに、後述するように、伴自が才磨ともかなり懇意であったことなどを勘案すれば、むしろ伴自にとっての来山は、師友ともいふべき存在ではなかったかと思われるのである。

つぎに俳号について見てゆきたい。伴自には、「伴自軒」のほか、「樹里門」・「俳仙堂」・「長布梁」・「祭通坊」等の別称があり、いずれも「伴自」に冠して使われている。ところで、『誹家大系図』最初に記される「蚊市」という号には問題がある。これがかもし伴自の別号であるならば、元禄四年の『誹家羽二重』巻二、「誹諧師」の条に「油小路三条上ル 蚊市」として一句入集していることをどう解釈すべきであろうか。このような京都住蚊市は、伴自も入集する『よるひる』（元禄四年）、それと同句が収まる『くやみ草』（元禄五年）、『とてしも』（元禄十六年）等に入集している。この間に伴自が大坂に住していたことは言うまでもなく、この京都住蚊市は別人と見るべきであろう。一方、大坂住の蚊市もいて、『都曲』（元禄三年）、『祇園拾遺物語』『蓮実』『すがた哉』『春の物』（以上元禄四年）、『続山彦』（宝永二年）等に入集。さらに『続古今俳手鑑』（元禄十三年）には伴自と同じ長井姓で入集する。すると、こちらは伴自のことかと思われるが、

実は『蓮実』の大坂蚊市の句は、『よるひる』の京都住蚊市の句と同一であるから、即断できないのである。このほかにも肩書の付されていない蚊市の入集する俳書をいくつか挙げる事ができるが、どの所収句も伴自の句と重複せず、また改号を知る資料も得られなかったために、蚊市が伴自の別号か否か確定するに至っていない。この点、今後の調査に期したい。

『誹家大系図』に記される俳書『ひばり笛』は伝本未詳である。今日、伴自編著として現存するのは『まひのは』（元禄十四年）と『例の癖』（元禄年間）の二本だけである。彼の撰集には逸書が多く、今知られているだけでもこの『ひばり笛』のほか、つぎのようなものがあつた。

。『住吉詣』（元禄五年頃。『仏兄七久留万』による）
。『難波拾遺』（元禄十五年。『花見車』、『故人俳書目録』による）
。『雪月花』（元禄年間。『花見車』、『故人俳書目録』による）

ただし、現存する角呂の編書と誤認した可能性もある）
。『糺の山ふかみ』（元禄年間。『花見車』による。『故人俳書目録』には、『紀の山ふかみ』とある）

。『かくれさぎ』（元禄年間。『花見車』による）
。『ぬけまいり』（年次未詳。『故人俳書目録』による。宮田正信氏『雑俳史の研究』所収「雑俳書目解題」によると、『俳諧登梯子』（宝永二年）奥付「新板誹諧書出来之分」に掲出される『ぬけまいり』は、最新版（伝本未詳）らしいのとことだが、あるいは本書のことか）

右の逸書の中には雑俳書を含んでいる可能性もあるが、それでも都合九種に及ぶ編著数は、同時代の大坂俳人の中では、圧倒的な数を誇っている。このことから伴自の実力を窺い知ることはできよう。

それでは、寛文末から順次、彼の俳歴を追ってゆくことにしよう。

二

初号は家久で、前にも触れたように、その名を文献上最初に見い出せるのは寛文十二年の『大海集』(宗臣編)においてである。この時「長井氏家久大坂住」として次の四句が入集している。

門松や葉色はおなし飾竹

月はあかし螢空しくさるの尻

色めくやはなのさきなる女郎花

色に出たは皆恋草の類ひ哉

いずれも卑近な事柄を理屈で処理しておかしみを狙ったもので、作意のあらわな稚拙な作と評することができよう。

これ以後、延宝三年の『大按』(以仙編。伝本未詳。『詞林金玉集』による)、同七年の『詞林金玉集』(宗臣編)等に入集したのが確実なところで、貞享期までの活動はよくわからない。彼の本格的な活動は、もっぱら伴自と号していた元禄期をまたねばならないのである。

そこで、つぎに元禄以降、伴自として入集した俳書を生前の集に限って、年代順に列挙しておきたい。(連句は、伴自が一座し

ている場合一と数え、出座順に連衆名を記す。伴自編の逸書は前に挙げたので除いた)

元禄三年

。嵐雪編『其俗』に発句二。

元禄四年

。順水編『^俳渡し船』に発句一。

。文十編『よるひる』に発句一。

元禄五年

。季範編『きさらき発句』に発句一。

。立志編『難波の枝折』に発句一。

元禄七年

。順水編『^俳諧童子教』に発句一。

。瓠界編『難波順礼』に連句一、伴自・瓠界〓両吟六句。

元禄八年

。青流編『住吉物語』に発句一。

元禄九年

。稲丸編『^諸呉服絹』に発句一。

。詠嘉編『^諸反故集』に発句一。

元禄十年

。助叟編『みとせ草上』に連句一、晴嵐・助叟・万海・榛国・伴自・茂吟・扣推・東行・半隠・才麿・史英・瓠界・渭川・園女・一礼・来山・団水〓半歌仙。

元禄十二年

。三惟編『梅の嵯峨』に発句三。

・東鷺編『小弓俳諧集』に発句一。
・等躬編『伊達衣』に発句一。

元禄十三年

・寸木編『金昆羅会』に発句四。

・笑種編『続古今俳手鑑』に発句一。

元禄十四年

・蘭道編『詩ふたつ物』に発句一。

・羨鳥編『たかね』に発句一。連句一、羨鳥・団水・伴自・呂雄・万海歌仙。

・東鷺編『乙矢集』に発句一。

・伴自編『まひのは』に発句十一。連句一、行雲・伴自・才麿・我亮・至得・呂雄・飛海・榛国・林樵・望夕・海秋百韻。

・我亮・至得・呂雄・飛海・榛国・林樵・望夕・海秋百韻。

・我亮・至得・呂雄・飛海・榛国・林樵・望夕・海秋百韻。

韻。

元禄十五年

・魯雞編『聖明鏡之間』に発句一。

・轍士編『花見車』に発句一。

・巨海編『詩石見銀』に発句一。

・霞夕編『和礼貝』(伝本未詳。『俳諧大辞典』による)に連句一、霞夕・才麿・伴自・一礼歌仙。

元禄十六年

・「元禄十六癸未歳旦」伴自・我亮・榛国歳旦三物。

・「元禄十六癸未歳」三惟歳旦に歳暮吟一。

・矩久編『青すたれ』に発句一。

元禄十七年・宝永元年

・「元禄十七甲申歳旦」伴自・我亮・榛国歳旦三物。

・座神編『風光集』に発句一。

・艶子編『分外』に発句一。

・如艸編『詩梓』に発句一。

・竹夫編『頭陀袋』に発句一。

・八虹編『土師の梅』(伝本未詳。『仏兄七久留万』による)に入集(「好色本目錄」による)。

元禄年間

・休計編『盃集』に連句一、才麿・休計・盤水・伴自・半隠・好郎・団水世吉。

・伴自編『例の癖』(上巻のみ)に発句二十一。連句四、伴自・湖梅・我亮・吞江・望夕歌仙。呂雄・伴自歌仙。伴自・我亮百韻。東里・伴自歌仙。

・我亮百韻。東里・伴自歌仙。

・我亮百韻。東里・伴自歌仙。

宝永二年

・如塊編『俳諧何枕』に発句十。連句三、如塊・可碩・伴自歌仙。秀隆・如塊・如雲・伴自・棟翠歌仙。吞江・伴自・湖梅・如塊・東里歌仙。

・海棠編『夢の名残』に連句一、海棠・伴自歌仙。

・潮白編『多美野草上』に発句四。

・百九編『通逃亭伊丹希李』に発句一。

・百里編『銭龍賦』に発句一。

・助給編『やとりの松』に発句一。

・沾州編『橘南上』に発句一。

・書肆編『鳥かぶと』(雑俳書)に歳旦発句一。

・書肆編『鳥かぶと』(雑俳書)に歳旦発句一。

・書肆編『鳥かぶと』(雑俳書)に歳旦発句一。

・書肆編『鳥かぶと』(雑俳書)に歳旦発句一。

宝永三年

。团水編『こころ葉』に連句五、来山・团水・珉子・伴自・八

虹ハニ歌仙。伴自・团水・湖梅・吞江・望夕ツキノミ歌仙。榛国・团

水・我亮・東里・伴自トモ歌仙。一札・团水・賀子・武仙・我

亮・東林・冬札・伴自・船舟・湖梅・芝石・海音・東里・文

十トウ追加二十二句。团水・我亮・伴自・扇外・芦船・湖梅・

東里・榛国・如辰・春秋・海音・吞江・冬札・望夕・至禿・

芝石・呂雄・旭水トウ半歌仙。

。梅員編『猫筑波集』に発句一。

。百三編『幸かな』に発句八。連句三、伴自・百三・冬札・湖

梅トウ歌仙。湖梅・伴自・百三・冬札トウ歌仙。百三・冬札・湖

梅・伴自トモ歌仙。

。生水編『津乃玉川』に発句二。連句一、伴自・生水・矩久・

大椿・李天トウ歌仙。

宝永四年

。文十編『海陸前集』に発句二。連句二、文十・伴自・来山・

潮白トウ歌仙。伴自・文十・湖梅トウ歌仙。

宝永五年

。蘭風編『荳野艸』に発句二。

宝永六年

。沽州編『十二月箱』に連句一、吞江・仙鶴・珍舍・水色・永

花・淡々・伴自トモ世吉。

宝永七年

。李天編『俳諧三十六歌仙』に発句一。連句二、文丸・李天・伴

自トモ歌仙。我亮・伴自・吞江・李天・榛国トウ歌仙。

。文十編『海陸後集』に発句四。

。珍舍編『遼々篇』に発句一。

正徳二年

。大立編『みちのかたち』に発句一。連句一、吞江・大立・岐

袖・伴自・李天トウ歌仙。

。寸木編『花の市』に発句四。

。李天編『俳諧統八百韻』に発句一。

。含羅編『俳諧鑪鏡』に発句一。連句一、湖梅・含羅・伴自トモ歌仙。

正徳三年

。羨鳥編『花橋』に連句一、羨鳥・岸紫・来山・一笑・伴自・

大立トウ半歌仙。

正徳四年

。湖十編『二のきれ』に発句一。

正徳年間

。波子編『大鼓』に発句一。

享保元年

。芦水編『豹皮集』に発句一。

享保二年

。李天編『古葉木満』に序文を寄せ、発句一。連句一、李天・

伴自・東行ら七十吟百韻。

以上

の入集状況を踏まえた上で考察を加えてゆきたい。

元禄三年六月刊『其俗』は、嵐雪の代表的撰集の一つで、彼の

広い交遊圈を示すものとして重要な資料である。本書に伴自が、「大坂」「難波」と肩書されて二句入集している。嵐雪が伴自の句を採録したのは、つぎに示すように、この頃二人がすでに知己の間柄にあったと見られるからである。『其俗』と同年で十月刊の鬼貫著『大居士』所収「禁足之旅記」には、

嵐雪に行て宿す

去年の秋は狐界この庵に来て夜長く。ことしの春は伴自が日永ふして我事いふに短く、また帰りにいふに長し。互に笑つて夜もすがら両吟す。句はその袋にむかふ。

とある。「禁足之旅記」は、老親を慮つて旅を思い止まった鬼貫が、机上で空想を巡らせ書きつづつた旅行記であるが、右の部分は、出版もない『其俗』を座右に書かれている。虚構の世界のこととはいえ、何の事実関係もなく、伴自の名を出すとは考えられないので、元禄三年以前、実際にここに描かれているような嵐雪と伴自の親交があったと見ておいてよからう。

一方で、当の鬼貫と伴自との関係も浅からぬのがあった。それは、鬼貫著「仏兄七久留万」によって、伴自の逸書『住吉詣』の巻頭句を鬼貫の「みとり立岸の姫松あてたさよ」で飾っていることが知られるからで、同書によればこの句のほかに四句入集していることもわかる。巻頭句が鬼貫であることは、『住吉詣』の成立を考える上でも注目しておいてよからう。

また、伴自は先の「禁足之旅記」中に見える狐界ともその後親交を深めていることがわかる。元禄七年頃の刊行と推定される狐界の撰集『難波順礼』によれば、狐界は、伴自宅を訪ね連句を巻

いていた。この部分はつぎのように記されている。

明わたる江南は樹里門伴自が栖。是につき物語の候。ある時伴自がいふ。綾の小路高倉通といへば聞よし我住町の安堂寺町は木の丸どのにあらば、社人たづぬる時は江南の伴自としへん。既に此集にもさのごとく記せよと云。されば誹友は水魚のごとくにして水火のごとし。

ここに記される伴自の口吻からは、彼の俳人としての自信が読みとれはしまいか。伴自の来山系俳書への最初の入集は、元禄四年の文十編「よるひる」で、翌年の元禄五年には自ら『住吉詣』を編むなどして、この頃すでに一人立ちできる力を有していたのである。しかも、元禄十年の『みとせ草』所収連句で一座した連衆の顔ぶれをみてもわかるように、元禄中期の大坂俳壇における伴自の位置は、確固たるものとなっていたのである。それに比して、来山の方はあまり表立った動きを見せなくなる。そのためか、伴自は急速に才磨へ接近してゆくのである。

現存する伴自の撰集の一つ、元禄十四年成立の『まひのは』の編集態度には、そうした動勢が如実に窺える。本書は序に榛国、跋に呂雄の文を得て成ったもので、七夕の句を中心とする発句一四六句と百韻一卷とで構成されている。この百韻は、森川行雲の発句で始まるが、行雲は立句のみ寄せて連衆には加わっていないので、事実上客伴自、亭主才磨という関係になっている。また才磨の入集句数も、榛国・呂雄につぐ六句が入集し、それらが重要な位置に排列されているのである。ちなみに来山の方は、巻軸に発句一句のみの入集である。このほかに伴自と才磨とが同座した

連句には、『盃集』（元禄年間）、『和礼貝』（元禄十五年）などに所収のものがある。また、伴自のもう一つの編著、紀行集『例の癖』（元禄年間）には、「すきものふだれ／＼椎本の翁が書るしゐの葉のしばし成にまかせて草履のひげをむしり」などとあって、才麿の紀行集『椎の葉』（元禄五年）に通じていたことが認められ、さらには『例の癖』全体の構成にも『椎の葉』の影響が窺える。これらのことは一見些細なことのようにだが、伴自の『まひのは』の編集態度から看取できる才麿への傾倒ぶりを思えば見逃せないことである。

才麿は、元禄二年冬に來坂してまもなく、來山門の人々と深い關係をもったのであろう。同四年には早速來山系俳書『よるひる』に発句九、編者文十との歌仙一卷が入集していた。こうした事実と前述した伴自の才麿に対する態度とを考え合わせても、才麿は、意外に早くから大坂俳壇内でも力を發揮していたことが知られよう。この時期の活躍が、來山没後の才麿一門台頭への布石となっていたことは疑いえない。元禄期における才麿の実力は、來山と比べて少しは遜色なかったのである。元禄十六年の伴自の歳旦三物、冒頭に、

來山も才麿もさぞ花の春

の一句がある。この句は、伴自の來山・才麿に対する敬意が表されていると同時に、元禄末期大坂俳壇が、この両雄を中心に展開していたことを裏付けてもいるのである。

さてここで、俳系を異にする人々と伴自との交渉をもう少し指摘しておきたい。まず、諸書に徴して、三惟・舎羅・天垂・美雀

ら諷竹園に属する大坂蕉門との交流が見られる。元來大坂での蕉門勢力は弱かったので、こうした結びつきには必然性があったのだろう。また、淡々や仙鶴らとは、沾徳門の高弟、沾洲編『十二月箱』（宝永六年）所収の「伴自吞江 出京を幸に興行」と前書される連句で一座したことが知られるし、露川は、來坂の折に伴自と会って酒を酌み交わしたことを『二人行脚』（宝永六年）所収発句の前書に記している。これらのことは、瑣末なことも含め、当時の大坂俳人の多くがそうであったように、伴自もあまり門流などにこだわらずに様々な俳人と親交を重ねていたことを証するものである。このように頻繁に他門の人々と交渉をもてたのは、俳壇が卓抜する指導者を欠いていたからだと思われる。しかしそうした事情ゆえに、かえって大坂俳壇独特の自由な雰囲気醸し出してもいるのである。

上述のごとく、広く交渉をもっていた伴自であったが、実は一つの小グループを形成していたことが認められる。それは、伴自の二つの歳旦三物に出句している榛国・我亮、諸書に必らず伴自とともに入集している呂雄・望夕・東里・吞江といった連衆である。研究史上ではほとんど無名に近い俳人たちであるが、伴自自身の俳諧活動が、これらの人々に支えられていたのも事実である。団水の『こころ葉』（西鶴十三回忌追善集）に所収されるほとんどの連句に、この伴自のグループが出席しているという事実は、当時京に戻っていた団水と大坂俳壇との關係を考える上で重要なこととしなければなるまい。ともかく、このグループが伴自の勢力圏であったとみて大方誤らないであろう。

ところで、伴自にはもう一つ強い結びつきをもった人々がいる。それは酒造家として著名な鴻池一族である。その一人、百三の『幸かな』（宝永三年）は、伴自を迎えて成ったもので、六水の序文には、伴自を評して次のように記されている。

俳諧は常にして作あるをもつてめづらしとす。こゝに浪華津の伴自は唐にしきをむすびて相撲といはず一句はなやかにして其こゝろふかし。聞人一唱三嘆せざるはなし。

こうした贅辞は、いわば序文としては常套的なもので、そのまま受け入れるわけにはいかないだろう。だが、伴自が俳人として他者からどう評価されていたのかを知る資料としては『花見車』について貴重なものである。彼が百三らに迎えられたのは、直接的には、『例の癖』（元禄年間）、『俳諧何枕』（宝永二年）、『こころ葉』（宝永三年）等所収連句でしばしば同座し、親交を深めていた鴻池一族の一人山中湖梅が関与したからではあるまいか。あるいは、鴻池には伴自が加点した前句付の作者たちが多くいたこととも関係があるうか。

それでは、六水が「一句はなやかにして其こゝろふかし」と評した伴自の句は、実際にはどう評価されるであらうか。元禄から正徳にかけての作品を数句挙げておこう。

蘭の香としらで風見る薄かな

星合や蔓についたる瓜小角豆

題目に踊出しける老の乳

松の実も千代を持たるにはひ哉

馬の背に山は流れて蕎麦の花

『其袋』

『乙矢集』

『幸かな』

『幸かな』

『海陸後集』

諸俳書にたびたび入集している句を中心に選出してみた。彼の句は、発句に関する限り、一様に平易なものが多い。どれもほどほどの軽妙さがあり、目のつけどころに面白さも感ずるが、理屈で処理する傾向は相変わらず強く、表現第一主義に陥っている観なきにしもあらずである。当時一般にはこうした句風が好まれてはいたのであらう。

つぎに雑俳点者としての伴自の活動をみてゆくことにする。

三

雑俳点者伴自については、すでに宮田正信氏の『雑俳史の研究』が備わっており、「元禄末から正徳にかけての大坂点者屈指の一人」として位置づけられている。本章では宮田氏の成果を踏まえた上でいささか考察を加えておきたい。

伴自の旺盛な点業の様子は、単独で伝わる会所本の『俳諧勝句付』（宝永七年）と逸題本（正徳三年）のほかに、元禄十年の『前句付』（宝永七年）から正徳四年の『大坂点者高点集』まで、改題偽板も含めた約三十の雑俳書から窺うことができる。これらの中で、『俳諧綱ばかま』（元禄十四年）と『千枚分銅』（宝永元年）、前出の『俳諧勝句付』には伴自の序文がある。

旺盛な点業といえば、来山・才磨・園女らについて調査してもほぼ同じ結果を得ることができる。従って伴自を加えたこの四人が、元禄期大坂における中心点者と見ておいてよからう。とくに伴自の点者として果たした役割は小さくなかった。

宮田氏の前掲書によれば、笹段々付の創始者を伴自と推定して

おられる。確かにその伴自点の収まる『俳諧綱ばかま』以降にか見られない新しい趣向である。とすれば、伴自はただ漫然と点料稼ぎをしていたのではなく、相当な意欲をもって雑俳に臨んでいたと想像できよう。それは、彼が元禄期俳諧のより一層の大衆化・低俗化を促す一端を担っていたということでもある。そして実際に、彼の点業が本格化するのには本書『俳諧綱ばかま』刊行の元禄十四年前後からで、俳諧の方で地歩を固めた時期と符合している。折しも輦士はその著『花見車』（元禄十五年）で伴自を「天神」に擬して、

ちかきころのつき出しなり。めき／＼とよい客がつきたり。

風俗もしかとはしりがたきほどの君也。人知れず内証になんぞうまい事が有かしやさて。

と評していた。この評が当を得たものであることは言うまでもない。そこで考えられることは、伴自が俳壇で優位を占めるのに、雑俳点者としての活躍が有利に働いたのではないかということである。もちろん、雑俳点専門の俳人ではなかったことはすでに明らかにしてきた通りである。伴自自身にとって、そのどちらかに比重があったにせよ、両方の活動が好影響を及ぼしあっていたことは確かなことであろう。その一例として、鴻池という特定地域との強固な結びつきが、前述した会所本『俳諧勝句付』（宝永七年九月鴻池会所興行）と、鴻池一族を中心に編まれた一般俳書『幸かな』の相方から推察されるということが挙げられよう。おそらく、来山・才麿・園女らも同様な地域的結びつきをもって活動していたのではなからうか。ともかく、伴自は、当大坂俳壇におい

ては有力かつ典型的な雑俳点者兼業の俳諧師の一人であったわけである。

さて、伴自の雑俳点業も含めた俳諧活動は、概ね上述の如くであったが、その活発な活動を反映したものが、『傾城仕送大臣』（元禄十六年、作者不詳）と、『好色万金丹』（元禄七年、夜食時分作）の改題改竄本『傾城太々神楽』（宝永二年）といった浮世草子の題材にもなっている。この点に関しては、野間光辰氏が作者をめぐって問題視されているので、本稿では簡単に触れておくことにする。

『傾城仕送大臣』では、巻三「土手町の座敷は金の間」に、「木曾山の材木仲間伴自と云し大臣」が、浪費のすえに古手買の身となる設定で登場している。これが事実とすれば、大変興味深い伝記資料となるが、なんら傍証は得られない。また、『傾城太々神楽』の方では、巻六「白うるり」前半部に、「武州長井の産」、「俳仙堂伴自」が、三都の著名俳人と交渉をもったことなどが記されている。本章は長文だが、「遠州浜松の産」、「紫竹堂驚栖」を前述のように差し換えたばかりは、ほぼ『好色万金丹』の記述そのままである。もともと「紫竹堂驚栖」なる俳人も素性が知れず、本章に描かれる著名俳人との交遊関係から特定人物を限定することも無理である。ついで、同章によるとこの俳人は、「米や町」に住していることになっているが、大坂での伴自の居所が明らかなのは、元禄七年頃の「安堂寺町」（『難波順礼』）、正徳四年頃の「淡路町」（『大坂点者高点集』）で、「米や町」に住したかどうか不明である。

さらに、『好色万金丹』各章の内容や趣向から見て、作者夜食時分が俳諧師と推察されることから、一時の野間氏のように、この夜食時分が伴自の匿名かとも疑ってみたが、その手掛りを得ることもできなかった。野間氏も結局、改竄されて成った『傾城太々神楽』巻六の場合、その上梓の際に伴自自身の手が入ったのではないかと推定されている。

このように、真偽のほどは一切不明ではあるが、浮世草子に登場するという事実から、伴自が当時から話題性に富んだ俳人であったことが認められ興味深い。

最後に伴自の没年を記して本稿の締め括りしたい。

来山が没したのは享保元年十月三日のことであったが、伴自も彼を追うように、翌享保二年初めに没する。伴自は言水とも縁があったのだらう。享保二年の『初心もと柏』には、つぎのごとき言水の追悼吟が載る。

難波祭通追悼

引き汐の世や夜たゞ鳴よし雀

祭通は、すなわち伴自のことである。来山百々日追善集『木葉古満』伴自序文年誌に、

享保二年丁酉如月下旬病中猶禿たり

祭通坊伴自 拝

とあり、この時すでに病に冒されていたことを知る。おそらく、回復せず逝ったのであらう。言水の句の季が夏であるから、この序文執筆の享保二年二月下旬以降、同年夏までには他界していたことになる。それは、来山の一周忌も迎えないうちのことであ

った。

以上のごとく、伴自の活躍期は、元禄から正徳に至る三十年間にあつて、雑俳点ばかりでなく、一般の俳諧活動も決して見劣りするものではなかった。そもそも私が伴自に興味をもったのも、野間氏が、浮世草子作家夜食時分と伴自が同一人物ではないかと疑われたことに端を発している。この点に関しては、本稿で触れた通り、否定的にならざるをえなかったわけであるが、元禄俳人としての一面は明らかにしたと思う。従来の俳諧研究は、この伴自に限らず、元禄時代の大坂俳人を十把一絡にして、談林くずれとか談林末流とか称してほとんど問題にしてこなかった。彼らを群小俳人と呼び、切り捨ててことは簡単だが、各俳人の個性的活動を無視しては、元禄俳諧のもつ特質や展開の様相を正しく捉えることはできないのではなからうか。享保時代への足掛りとしても、また蕉風の影響を考える上でも、もっと元禄の大坂の俳諧は研究されてしかるべきだと思う。本稿で来山門伴自の俳歴を素描してきたのも、そうした視点を前提としている。

注(1) 岡本勝氏蔵本(『鬼貫著『仏兄七久留万』の初稿本)『俳句』昭58・9(昭59・1に翻刻)によると、本書は元禄五年と六年の二通りの記載がある。

(2) 『遊槽太鼓』の条につぎのようにある。

『俳諧土師の梅』八虹撰 宝永元年印本

前 腹へ風のくんで落ちけり 東里

附 西鶴はいずれ一代男にて 伴自

(3) 岡本勝氏蔵本、注(2)による。柿衛文庫本では一句少ない。

(4) 桜井武次郎氏『元禄の大坂俳壇』による。

(5) 飯田正一氏『来山年譜稿』(『園田国文』1~3) 参照。

(6) 才麿と来山、及びその一門の動静については、富田志津子氏『才麿と来山』(『連歌俳諧研究』66号)に詳しい。

(7) 京都大学文学部蔵。未見。ただし、『誦大黒柱』(正徳三年)に改変されて所収(宮田正信氏『雑俳史の研究』による)。

(8) 天理図書館綿屋文庫に『伴自点誦諸五十韻』と題する一卷が蔵される。連衆は、龍水・器水・東流・吉次・正流の

新刊紹介

暉峻康隆・字咲冬男著

『連句の楽しみ』

近年、『連句入門』なる書が、いくつか出版されている。また、週刊誌では作家達が連句を巻いたり、学者達が一座したりしていくつかは刊行されたりもする。子規によって息のねをとめられたはずの形式が、どっこい生きていた、といえようか。

本書の「楽しみ」は、「前句をいかに生かし、引きたてる付けができるか——を考

え」と素晴らしい付句ができるものです。」という著者の言葉に尽きている。

往復書簡による桐雨(暉峻)と冬男(字咲)の付き合いの楽しさが、読者に向けて開かれ、読者を巻きこんでくれて、楽しい。あなたを生かすことが、わたしも生きることでしょ、そして、その形式として連句があるのですよ、と本書は随所で語りかけている。私達は、未来に向かって開かれた連句入門の書をはじめて手にした訳である。(昭59・6 桐原書店 四六判 二三八頁 八八〇円)

〔玉城 司〕

五人で、雑俳書にそれと覚しき名が見えるので、おそらく前句付の作者たちであろう。この五吟五十韻に対し、伴自の点評が付されており、当時の具体的な点業の一端が窺える。

(9) 『定本西鶴全集 第十二巻』「こゝろ業」解説、日本古典文学大系『浮世草子集』「好色万金丹」解説参照。

付記

本稿をなすにあたり、天理図書館・大阪女子大学附属図書館・国会図書館等のお世話になりました。また、来山の歳旦集については、飯田正一氏の御示教を得ました。あわせてお礼申し上げます。

編集部より

『国文学研究』では、会員の皆様の著作の紹介につとめております。新たに著書を刊行されました際には、是非一部ご寄贈下さいますようお願い申し上げます。研究上の貴重な資料として永く保存するとともに、広く教員・学生等の閲覧に供し、大いに活用させていただきます。また、お気付きの新刊書がありましたら、編集部までご一報下さい。